

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01846

研究課題名（和文）芸術祭に関与する諸アクター間の「認知的ズレ」に注目した認知ネットワーク分析

研究課題名（英文）Cognitive differential network analysis of actors involved in art festivals

研究代表者

金光 淳（Kanamitsu, Jun）

京都産業大学・現代社会学部・教授

研究者番号：60414075

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国際芸術祭「あいち2022」と瀬戸内国際芸術祭において、作家、観客、キュレーターなどのアクター間の芸術祭そのものや作品に関する認知的なズレを、認知ネットワーク分析の方法で明らかにしようとする研究である。前者の芸術祭においては、主催自治体の方の協力を得られず、調査は断念したが、後者の芸術祭においては、「豊島美術館」自体を作品として解釈した場合、作者とキュレーターとの認知のズレを鑑賞者の介入的な社会調査において見出すことができた。この実験的調査から、芸術祭における作品の鑑賞には、作者、鑑賞者との間に「アート媒介者」という役割が重要であることを示している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、アート・フェスティバルにおけるアート作品に関する作者、キュレーターと、鑑賞者間の大きな認識の違いを、認知ネットワーク分析によって明らかにしたものである。その際、調査者自体の介入が認知変化に大きな役割を果たしたことが示された。このことは、作品の鑑賞の質を高めるには、旧来の美術評論家のような高尚な人々の抽象的な文章による解釈ではなく、現場での「アート媒介者」の存在が欠かせないことを示しており、今後のアート・フェスティバルのあり方、美術教育のあり方にも一石を投じる知見を提供できた。

研究成果の概要（英文）： The research addresses the differences and gaps in cognitions toward the art festivals themselves and artworks among actors involved in two art festivals, Aich Triennale and Setouchi Triennale. Gaps of cognitions toward the art festivals themselves and artworks are studied by a social survey and cognition network analyses. Concerning Setouchi Triennale, research shows that cognition gaps in Teshima Museum, as an installation artwork, are quite large among artists and spectators. In a social survey, the role of “art mediator” plays a key role in helping fill the gap. As for the other art festival, Aich Triennale, a survey was accepted among curators and artists because of privacy.

研究分野：社会ネットワーク分析

キーワード：アート・フェスティバル 鑑賞者調査 連想ネットワーク分析 瀬戸内国際芸術祭 国際芸術祭「あいち2022」 計量美学 アートツーリズム

1. 研究開始当初の背景

地域活性化のために全国で開催されるようになってきているアート・フェスティバルに關与するアクター(プロデューサーとアーティスト、協賛企業、地方自治体、来訪者=鑑賞者)の間には、芸術祭のコンセプトの理解において「認知的ズレ」がみられることがあり、2018年の「あいちトリエンナーレ」では、市長と県知事の対立構造もあって紛糾し、この大きな「ズレ」によって一部作品の展示中止という事態を招いた。このような「ズレ」がどうして生じたのかを、アクターの埋め込まれた社会的ネットワークと関連したアクターの認知構造に注目して探る必要がある。そこで2022年に開催されることが既に決定されている芸術祭の基本コンセプトに関する各種アクター(プロデューサーとアーティスト、協賛企業、地方自治体、芸術祭の来訪者=鑑賞者)の「認知的ズレ」がどのようにして生じるのかを問うことであった。

2. 研究の目的

芸術祭に關与する各種アクター(プロデューサーとアーティスト、プロデューサー、地方自治体、芸術祭の来訪者)が埋め込まれている社会ネットワークとともに、芸術祭の基本コンセプトに関する「連想ネットワーク」に注目し、どのような社会的文脈において「認知的ズレ」が生じているのかを特定することである。

3. 研究の方法

認知ネットワーク調査では、図1のように「芸術祭の基本コンセプト」を根として、そこから放射状に連想されるキーワードを、各種の関係アクターに記入してもらうことによってとらえることができる。元の連想ネットワークを多数のアクターに対して集計し、同じ種類のキーワードの「分類カテゴリー間の隣接行列」に縮約することができる。また「認知ズレ」は認知ネットワークの構造特性、概念ネットワークの違いを比較することによって比較、測定できる。

4. 研究成果

当初の予定では国際芸術祭「あいち2022」について、芸術祭に参加しているアクターの間での芸術祭に関するビジョンのズレについて調査する予定であった。しかし、国際芸術祭「あいち2022」の前身「あいちトリエンナーレ2019」での「表現の不自由展」をめぐる紛糾の余波を受けて主催者や参加アーティストに関する情報提供のガードが固く、調査への協力が得られなかった。そのため、継続調査している瀬戸内国際芸術祭2022での観客調査と国際芸術祭「あいち2022」の出展アーティストの調査を対象を限定し、研究の枠組みを大幅に変更して研究を継続した。

瀬戸内国際芸術祭2022においては、豊島美術館前で鑑賞者調査を行い、社会的実践としての現代アートの持つ問題提起力、想像力、社会批判力を実証的に明らかにした。産業廃棄物問題という負の遺産を抱えた豊島のアートサイトにおいて、美術館+アート作品が想起する美的判断の生成メカニズムを明らかにする認知構造変化の社会実験調査を行なった。産業廃棄物の写真誘導法を利用した実験では以下が判明した。1)認知構造変化者は、変化前には「水、白、水滴」などの少数のコンセプトに集中し、変化後では「美しい」というコンセプトが卓越し、社会批判的なコンセプトも出現する分散的認知構造である。豊島美術館

が表象していたのは、かつての産業廃棄物の島を感じさせないほど自然に囲まれ、再生された「美しい」豊島であった。2) 連想ネットワーク分析などによって、認知変化の有無と鑑賞者の年代、豊島事件知識に関する社会的条件が確定された。3) またアレゴリカルな「美的効果」を引き出した「文化媒介者」としての社会調査者の触媒的役割が見出された。また国際芸術祭「あいち 2022」の出演アーティストの一人にインタビュー調査を行い、アーティスト間の社会ネットワークをメールアートによる交流から明らかにし可視化した。

1) 変化の分析

介入実験によって連想イメージを変化させた64人に対して収集された回答者の連想ネットワークは、それぞれ変化前と変化後のイメージ全体として集計され、「合成グラフ」として構築された(図1)。

図1 変化前後の連想ネットワークの統計量(変化させた64人分)

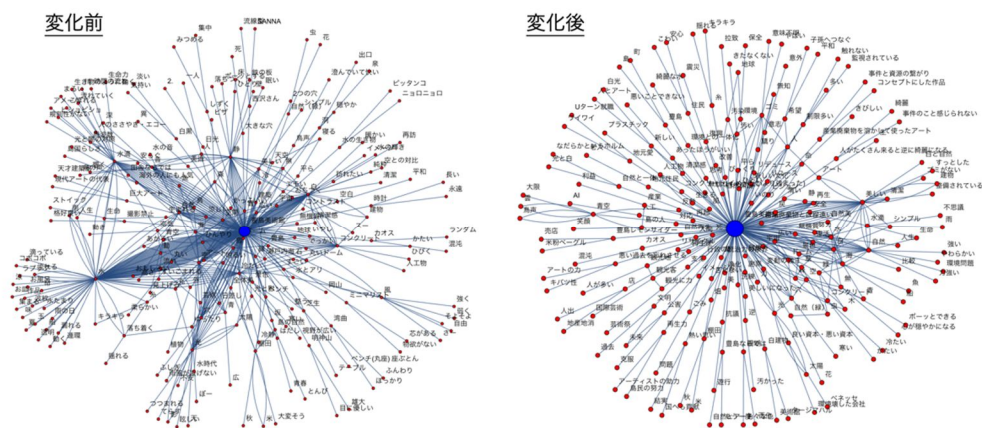


表1 変化前と変化後の連想ネットワーク比較

	変化前	変化後
ノード(コンセプト)数	232	215
エッジ(連想対)数	526	343
コンセプトジニ係数	0.619	0.442
コアなコンセプト	水、白、水滴、丸、空、広い、無、静、光、自然、ドーム、穴、美しい、豊島美術館(4コア、14ノード)	美しい、自然、海、森、草、水、景色、豊島美術館(3コア、8ノード)
コア・コンセプトへの集中度 Max=1.0	0.694	0.268

2) 「美しい」というコンセプトの意味内容分析

上で行われた、ややトポロジカルな分析を、カテゴリカルな分析に進めるために、コンセプトの内実とコンセプトの接続構造に注目することで、コンセプトによる「意味の生成」を詳細に探ってみよう。

ワードクラウドを作成してみると、意外にも「美しい」というコンセプトは認知構造の変化前には相対的にも絶対的にも少なく、逆に認知構造の変化後の方が格段に増えていることが発見された。卵形のコンクリートに2つ穴の空いた、シンプルなシェープで目を惹く豊島美術館の第一印象を隠さず表現すると想定された「美しい」というコンセプトは、ほとん

ど使用されていない。この「逆説」は、一体どのように解釈すれば良いであろうか。これを詳細に分析するために、各連想ネットワークにおいて「美しい」を起点とする直接の連想結合集合を抽出した「近傍グラフ」を図2のように求めた。

認知構造変化前では、そもそも豊島美術館からの直接的連想も少ない上に、それと連結するコンセプトも多くないが、実は他

のコンセプトとの連結も弱い。他方、変化後では「美しい」は豊島美術館からの直接の連想が多い上に、コアなコンセプトとの連結も多様で強い。特に豊島美術からの直接の連想数も多い「再生」や「自然」へと連結している。つまり、変化によって「美しい」と表現した回答者が多かったのは、かつての産業廃棄物の島を感じさせないほど、自然に囲まれるようになった再生された場所としての豊島を豊島美術館が象徴していると感じたからだと言える。それを「美しい」という極めてシンプルな言葉で表現した。つまり平凡なコンセプトでありながら、あるいはだからこそ、新たな文脈の中では他のコンセプトの形容詞として「綺麗になったアート島の美術館」の新たなイメージを表現する重要なキーワードになりえたのである。

現代アート作品（あるいはデザイン建築）の機能は、とりわけ社会的文脈に依存し、空間だけではなく、時間的にも不確定なのである。そして、ここでみられたように現代アート作品はしばしばその効果として、「あるもので別のものを表現する」ポストモダンな「アレゴリーの衝撃」を有するのである。

3) 認知構造変化者と認知構造非変化者の比較分析

前節の分析で行なったことは、われわれの介入調査によってアート作品への認知に関して変化を起した鑑賞者の、＜変化する前＞と＜変化した後＞の認知構造の違いであった。第二の問いは、＜変化を起した鑑賞者（認知構造変化者）＞と＜起こさなかった鑑賞者（認知構造非変化者）＞との違いは一体何であるのか、である。このような分析の課題は、認知構造を生み出すアクターとしての鑑賞者の＜社会的属性＞が埋め込まれた社会空間＝複数のポジションから構成される布置を詳細に調べることである。つまり、社会構造空間と認知構造の対応関係を調べることによって、アート作品の鑑賞者の認知構造変化に関わるメカニズム（これは美学の根本問題でもある）を突き止めることができるであろう。

＜起こさなかった鑑賞者（認知構造非変化者）＞56人の連想ネットワークのグラフを構築し、＜起こした鑑賞者（認知構造変化者）＞64人とのグラフ構造比較を試みた。結果を要約した表2からも分かるように、両者においては大きな変化はない。これは図2のワード・クラウドとネットワーク図を図1と比較しても見て取れる。

認知構造非変化者の認知構造変化者とのわずかな違いを探せば、後者のノード（コンセプト）数とエッジ（連想対）数がやや少なく、コアを構成するノード（コンセプト）数がやや多いことである。とはいえ両者の人数は前者が8人多いことから、これがグラフ統計的には

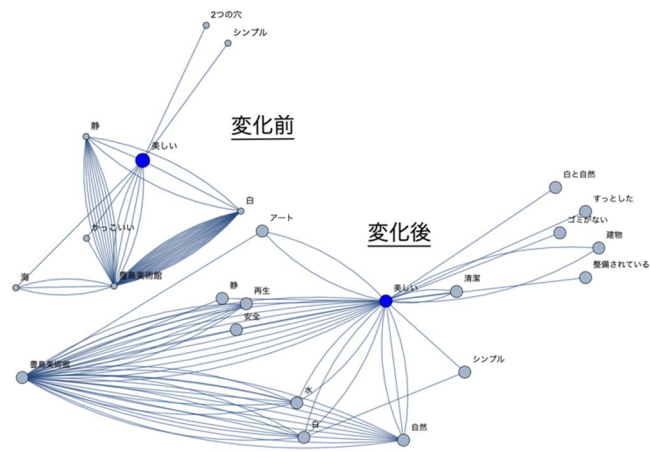


図2 変化前後のコンセプト<美しい>の近傍グラフ

有意な差であるのかは、ここでは単純には検証することはできないが、認知構造非変化者の連想がやや分散的と言える可能性もある。これを、端的に美的感覚を表現と思われる<美しい>というコンセプトの近傍グラフで見ると(図3)、認知構造変化者では<豊島美術館>に3本接続しているのに比べて、認知構造非変化者では1本しか接続していない。

図3 認知構造非変化者のワードクラウドと連想ネットワーク

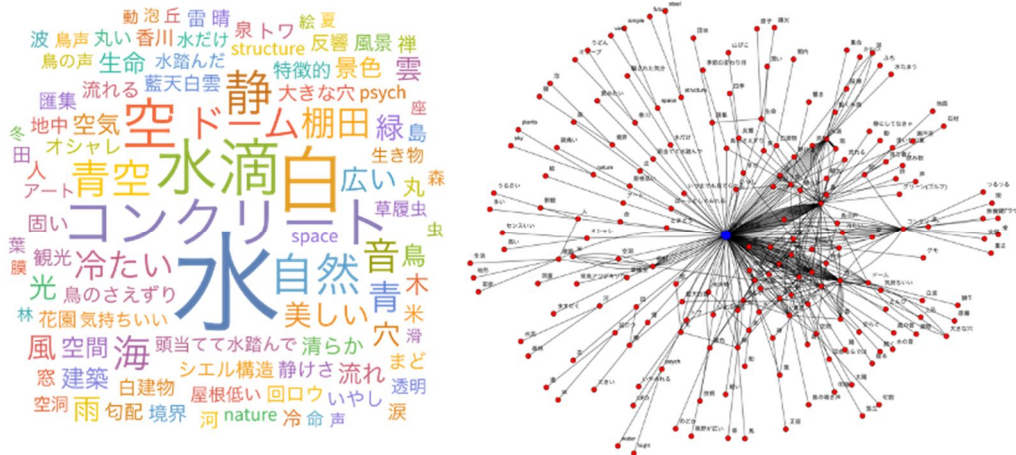


表2 変化前後の連想ネットワークの統計量

	認知構造変化者の 変化する前	認知構造非変化者
ノード (コンセプト) 数	232	192
エッジ (連想対) 数	526	454
コンセプトジニ係数	0.696	0.673
コアなコンセプト	水、白、水滴、丸、空、 広い、無、静、光、自 然、ドーム、穴、美し い、豊島美術館 (4 コ ア、14 ノード)	海、美しい、ドーム、 冷たい、自然、空、 青、水、白、風、青 空、静、鳥、広い、 光、コンクリート、 穴、豊島美術館
コアなコンセプトへの集中度	0.669	0.709

一方、認知構造変化者では<豊島美術館>以外に4本接続しているのに比べ、認知構造非変化者では7本も接続している。認知構造非変化者の方が8人も人数が少ないことを考えると、認知構造非変化者の方がやや連想が豊富で、「感覚が優れている」と言えるかも知れないが、これを統計的に有意な差であるのかを検証することは困難である。

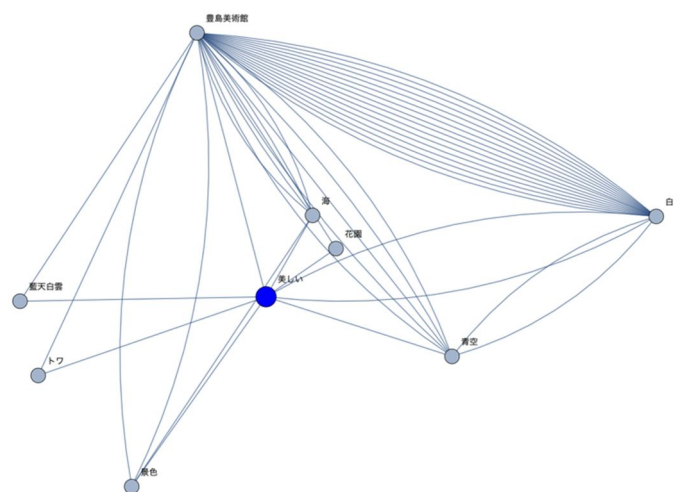


図4 認知構造非変化者のコンセプト<美しい>の近傍グラフ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 国際アーティスト集団Fluxusの拡散過程 メールアート作品データのネットワーク分析からの知見
3. 学会等名 第73回関西社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 流動形態の前衛芸術家のスモールワールド メールアート・コミュニケーションの社会ネットワーク分析
3. 学会等名 第95回日本社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 現代アーティストの「メール・アート実験」は何を語るか 「グローバル・アートワールド」の形成の社会ネットワーク分析
3. 学会等名 第94回数理社会学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Jun KANAMITSU
2. 発表標題 Sociological Investigations into the formation of "Global Avant-garde Art World": a social network analysis of a mail artwork of a female Fluxus artist in the 1960s-70s
3. 学会等名 International Conference for Social Network Analysis (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 国際アーティスト集団Fluxusの拡散過程 メールアート作品データのネットワーク分析からの知見
3. 学会等名 関西社会学会(第73回大会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------